

さあ、第二部！

蠅螂の斧

(とうろう の 木の)

社会システム変化への介入 part 2

KISWEC家族療法訓練 第一回

団 士郎 仕事場D・A・N/立命館大学大学院

千葉晃央(記録者)

1985年の年明け早々、「京都で家族療法訓練講座開講」の案内文が、近畿エリアを中心に流れた。1983年中京大学で開催された日本心理臨床学会で、亀口憲治氏の「児相に於ける家族療法実践」の報告に触れ、関心はあったが、一方で、流行モノのうさんくささも感じていた私には思案のしどころだった。当時、私は児相の心理職だったが、家族療法に関する偵察は、スタッフの誰かを派遣して対応していた。

しかし地元で開講されることでもあり、事前に講師(G. D. シメオン先生)との面接まであるプログラムに、いよいよ覚悟を決めて参加することにした。約30年前に年学費22万円という負担を覚悟して取り組みはじめたのが「家族療法」と関わる始まりだった。(このあたりのことは、「ヒトクセある心理臨床家の作り方」金剛出版2002年刊に詳しく書いたの、興味のある方はご覧下さい。)

研修の行われる京都国際社会福祉センター(KISWEC)とは、結果的に30年にも届こうとする関わりを持つことになった。初めは受講生、そして伝達講習のような形から始めた家族療法訓練通年講座も約25年。四半世紀ともなるといろいろなことがあった。初期は三人で、その後、早樫との二人三脚だったが、この間には、私一人で担当していた年もある。早樫が勤務の関係でレギュラー担当できなくなった時期である。その年の記録を「蠅螂の斧—社会システム変化への介入— 第二部」として連載しようと思う。

年間プログラムの大筋は基本的に変更しなかったが、進行上細々した雑用がないわけではなく、千葉晃央(KISWEC所属)がアシスタントとして付いてくれることになった(彼もかつては受講生として一年過ごしたことがある)。彼は毎回、同席してプログラムの準備などサポートしてくれた。

しかし特別な任務が頻繁にあるわけではないので、講座の内容をその場でPC入力していた。今回の連載はそのテキストが元になったものである。千葉が入力した記録データを、LIVE感はそのままに、読み通せるように私が編集した。

第一回目の作業を実施しての印象は、一から書いた方が簡単だということだった。小グループでのしゃべりは、周辺関連事項等、余計な話も多くなる。加えて私は、そんなモザイク状の喋りが好きな人間である。

しかし、進行する講座を LIVE 記録し、それを振り返ることなどなかなかない。こういう方法だからこそ届くモノもあるかもしれないと思った。(それでも連想ゲームに近いような雑談はいくつか省いた)

あまり直接的技法を伝授していることにはならないが、幅広い人々に家族療法に関心を持って貰う現任訓練のあり方として、やや冗長になっても、そのまま記録しておこうと思った。

元のテキスト量が多いので、加筆は最小限にとどめたいと思っはいるが、すすめてみないと分からない。読者に楽しんでもらえるといいが。

*

前期・後期に分かれた訓練の前期は、「健康家族面接」を受講生全員が一度ずつ経験する事になっている。この年の受講生は8人であった。それぞれが手配してきた『症状、訴えを持たないボランティア家族』に、他の受講生が一回きりの家族面接を既に体験していた。担当以外の受講生とトレーナーはマジックミラーの後で観察する。

つまり受講生は前期に合同家族面接の方法の学習と、家族(主訴症状など、持たない人たち)との面接体験、そして七家族の面接ライブ観察を経験している。(これは一般的な日本の家族の持つ多様性を見ることになる)

後期は、前期の体験を念頭に、家族療法、家族の構造的理解、実際の臨床場面に於ける家族への関わりについて、事例検討も含めて学習を深める。これから述べるのは、その後期、いよいよ家族を構造的に理解し、そこに援助的関わりを展開してゆくことを考えるプログラムである。

受講生発言のひとつひとつを、現時点で了解を取るのは困難なので、講師、記録者以外の参加者名、開催年月日等の識別情報を伏せて記述する。

後期 初回

(前期から通算12回目)

後期開講

開講定刻18時45分少し前、部屋に入りました。すでにほとんどの受講生が到着していました。講師がパソコンをプロジェクターにつなぎ、パワーポイントの最初の画面が映し出され、後期が始まりました。

T. :こんばんは。お久しぶりです。今日から後期です。このクラスは、前期、皆勤賞でしたね。みんな体が丈夫なのか、強迫的なのか…。

受講生は現任者ばかりなので、仕事の都合や、家族事情など、やむを得ない欠席はあるものなのですが、全員

が皆勤というのは、ここでの長い訓練の歴史で初めてのことです。

休まずに続けるのは、なにか物事を成し遂げようとする姿勢として、とても適切です。暇ができた時にちょっとやってみるとか、面白そうなので囁ってみる等というものが学びになるはずがありません。

休まずやったからといって、必ず何かになる保障があるわけではありませんが、適当にやっても身につかないのは当たり前ですから、真面目に続ける方が可能性は広がります。こうして、皆さんが休まずに来ていると、こちらも改めて、心をこめてやらなければならないな

と感じます。

いよいよ後期ですけども、従来、早樫さんと二人トレーナー体制で実施していた訓練を、今年は一人でやっていますから、今までと少しは違うのですが、おおむね例年通りだと思ってください。

あとの休憩時間に、今期の皆さんの時間割り当てを決めていただきます。後期各回の内容は、その日割り当ての人を中心に深めていく形になります。

で、初日の今日はジェノグラムをベースの事例検討です。

ここにいるアシスタントの千葉君は、立命館大学大学院で月に一回、『かじけん(家族事例検討会)』という勉強会をしていて、そこでも続けているやり方です。

毎月第三木曜日の18:30から(8月のみ休み)立命館大学・衣笠キャンパス・創生館411号室で開催しているケースカンファレンスは、現在も継続中です。

ルールは多くありません。正しかろうと間違っていようと、気にせず、その家族についてひらめいたことを言語化する。これが一番のルールです。

自分の職場でも、そういう役割の果たし方をしないと、他の人から意見はもらえません。職場にはパブリックな事例検討もあるでしょうが、参加者が多かたり、立場上の発言もあつたりして、なかなか細かいところまで話がいかなくなつたりします。

規模が大きくなるほど、担当者の説明は周到でなければならぬし、一方、自分の欲しいものはなかなか貰いにくくなつたりします。(公式見解として間違っていないことと、下世話だけれども役に立つことは、しばしば異なります)。だからというので、一人で抱え込んで独断で進めてしまうのも不安ですし、リスクも高くなります。

そんな時に、同じ職場やセクションの人たちに、『少し時間とって下さいますか?』と短時間、複数少人数でのケースカンファレンスを打診します。『ピアグループスーパービジョン』の形です。

提出者が延々とケース説明をして、聞いた同僚が『大変ですねー』とねぎらつたり、SVが解釈コメントをして終わってしまうような形は採りません。

このピアグループスーパービジョンは提出した側が、必ず何か手に入るやり方をしないと意味がありません。自分の頭だけで考えていた見立や処遇のプランニングを、他者の頭も使ってやれるかどうかが大事になって

きます。

この方法は、自分自身の家族のことで思案中のことがあつたりした場合にも使えます。

『ちょっと考えてくれませんか?』と打診されて、わずかな情報だけを知らされた側は、いろいろ頭を使います。細かい情報を沢山伝えて、相手と自分を均等化して、何かをしようというのではありません。

『そのケースの情報は少ないが、家族一般についてはよく知っている人』というのは、提出者(担当者)とは違った機能の仕方が可能な人である、こういう風に考えます。

組織・チームで仕事をしていく時、自分と同じような人がたくさんいても、あまり有効には機能できません。自分とは異なる力を持ってもらった方が、チームとして機能します。似た人を求めるのではなく、違いを資源として生かすのです。

またこの事例検討の参加者には、それぞれの職場で、ケースの処遇展開のマネジメントも出来るようになっていただきたいとも思っています。

それも経験をして貰うのが一番だと思うので、今から、誰かにファンリテーターになってもらいます。進め方としては、出来るだけいろいろな意見が出てくるようにしてください。正しい答や結論があるものではありませんので、いろいろ声がもらえるように進めてください。

事例検討

今日は初回ですので、講師からケースを提供します。

まず家族の情報を自分の手でジェノグラムに落とし、この家族にどういった心配事があつたり、どんな事情があつたりするだろうかを考えてみて下さい。今後も何度も言いますが、言い当てたり、見破つたりするのが目的ではありません。

基本的に我々は自分自身の家族以外を、そんなに知らずに、『何も心配のない家族状態から、多問題の渦中という状態』までの幅のどこかを生きています。

パワーポイントで、以下の内容が示されました。みんなの視線がホワイトボードに移りました。

PP1

父	45歳	公務員
母	41歳	主婦
長女	19歳	短大生
次女	16歳	専門学校生

「では、この家族について各自、3分ほど考えてみてください」と、T. はキッチンタイマーのボタンを押しました。

私(千葉)は先ず、父26歳 母 22歳 長女0歳。父29歳 母25歳 長女3歳 次女0歳と、出産時の家族の年齢を整理しました。ここからおおよその最終学歴の見当がつかます。多分、母は高卒、父は大卒でしょう。

男一人の家族で、娘達が思春期。父親が気持ち悪がられて避けられるなんて話はよく耳にします。

早い時期から子育て専従の母親と娘達が強く結びついて、夫婦が疎遠化するなんて問題も聞きます。そんな状況では、父親に女性関係なんかも考えられます。妹が16歳で専門学校生は珍しいので、義務教育の部分で挫折した経過があるのではないかな…こんなことを想像していました。

ピピピッ、ピピピッ 時間です。

まずこういう作業、初めての人もいるでしょうから、簡単に解説しておきます。

子どもの年齢をみて、これは家族のステージとしてどういう頃だろう。家族員それぞれが、この時期にどんな時間の共有の仕方をしているだろうと想像してみてください。

『言い当てる』のは目的にしています。当たったところで、それが提出者に役立つことはありません。

どういう力動が家族の中で起こりやすい時期か。自分自身の体験を振り返ってみるなど、己を資源としてフルに使ってみてください。

ではミニディスカッション、8分です。まず、みんなが思うことを出し合って、それから、どんなことがあるだろうかと、話し合ってみてください。

3人1組でいきましょうか。もうみんなお互いに知っている同士ですから、誰でもいいですよ。

各組、お互いの声が気にならないように、部屋の中で

散らばって始めましょう。

8人+千葉で

PP2

3人組で考える。 3人で想像したことを話し合う

各組一斉に話し出しました。

8分経過 ピピピッ、ピピピッ 時間です。

「はい、時間です。ではここに(ホワイトボードを指して)今から、ジェノグラムを書いて、始めていきましょう。指名されたグループがファシリテーター(進行役)になって、ホワイトボードに書き込みながら、話が進むように全体を進行していきましょう。」

指名されたのは、Aさん、Bさん、Cさんの組でした。

「まずジェノグラムを書きましょうか。」

「公務員といっても、いろいろあると思いますが、何やろう?という話が出ていましたか?」

「本当にいろいろあるなど。父の仕事によって、生活が変わってくるのではという話が出ました。」

そのあと、教室がしばらく静かになりました。

T. :「黙ってたらかんで。」と促しました。

「上の世代との同居はないのか、なかったのかな」

「このお父さんが仕事に就いた頃は、バブルの時代と思うんです。その時代、公務員はあまり人気がなかったのではないかと思います。」

T. :「今の視点なんか大事やね。まずジェノグラム見たら、出ている年齢が現在のものか、過去のことを確かめないとイケませんね。この場合、実際はわからないね。」

過去を振り返る時、その当時の配偶者選択の多数派行動を考えたり、その時代背景を想像するという作業をします。すると、大変だったろうとか、今と違って、意外と楽やったやろうとか想像できるものもあります。続けましょう。」

再び、ファシリテーターの出番です。

「娘二人で気になったのが16歳の妹です。高卒後ではない専門学校生はあんまりいないかなと。そのあたり、おきかせいただけないでしょうか？」

T.「硬いな！」

教室は笑いで包まれました。Aさんはテレながら、「どうでしたか？」と言いました。

「16歳で専門学校はありえないと思うんですよ。行きたかったより、そこにしか行けなかったのではないかなと。知的な遅れとかあって、専門学校というニュアスかなと、

「なので、選んでではないだろうと。行かざるを得ない事情があるのではと。」

T.「昔、N県に生徒の半分以上が療育手帳を持っている芸術系の学校があったなあ。なにやってたのかなあ」

ここで、自分では選んでいないだろうと話が落ちつきそうになった頃、違う意見が出ました。

「逆に、選んだのではないかな。行きたいと思わないと専門学校には行かないのではないか。もし自分で行きたいと選んでいたのなら、この家族メンバーの中では異なったカラーの人かなと。」これで話は混沌としてきました。「結局、行かされているような感じじゃないかなあ。この時期の進路は、まるまる自分の意思で決めるっていうよりは、親の勧めがある時期じゃないかな。親の決定で行くことになっているんじゃないのかなあ」

これで行かざるを得ない派、希望で行きたい派、行かされている派、3派が集まりました。

ここで、遅れていたDさんが到着しました。これで前期と後期の1回目まで全員出席です。

トレーナーはDさんに状況説明をしました。

T.「今ね、こういう家族について考えることになっています。進行役はこのグループになっています。」

Eさんがさっきまでの話の続きで、「その理由は、私のところも、行かされてるというイメージです。」

書記のBさんが「誰に行かされてそうとかありますか？」とEさんを中心にしながらも、全体を見渡し、ききました。

「本人の意向よりは、親の意向のように思います。父はあえて、公務員を選んでいるのではないかなと、そういうところから、世間体とかを気にしていそうな気がします。」

と、父の職業選択に話が及びました。

「この年齢で、娘が二人とも言うこときくかな？とふと思いました。親の意向を考えて決めたかなあ？」

活発な姉妹なら、父を相手にしていないというのも、よくあるように思います。

「行かされているっていうか、行ける高校あるなら、世間体も考えたりするなら、高校に行かせないかなあ。」

「ものすごい(評判の悪い)高校いくより、専門学校なんじゃないかな。だから、自分でここ行くわと言った方が自然かなと。」

これもなんだか、少しありそうな気がします。

「親と話して、お互いの、ここならいくという妥協点なんちゃうかな。」

このあたりになってくると意見がぼんぼんと出てきていました。

「どんな専門学校かなという話が出ていて、まず美容師ぐらいしかないのではと。コンピューター関係もあり得るかな。」

T. はこれをきいてうなずいていました。

16歳からできる内容で、専門学校となると限られてくるかもしれません。ファシリテーターも慣れてきましたし、みんなが発言するので、次のフリです。

「そちらは、専門学校の件どうですか？」

「そんな感じかなと。16歳が専門学校に行く、と言ったら、父はどうかなと想像してみている」

「どう言うと思います？」

「せめて高校ぐらいは行っとけよというかな。親としたらそうですね」

T.「中卒では仕事がないからね。それが現実やし、求人広告見ても、まあ高卒やね。」

「うちのグループでは専門学校は彼女が選んだのかなと。父が娘のことに関心がなくて、あまり、父が近づかないからできたのかなと。親が近くにいたら、高校ぐらい行けと絶対言っている。」

無関心説ですね。誰が選んだにせよ、子どもの進学への関心度の強弱はありますよね。

「お母さんは専業主婦で、お金はお父さんなので、やっぱりかかわっているのではないか。」

お金を握るパワーのところですね。働いているのは父だけど管理は母という家も多いですね。財布を握っているのは誰でしょう？

「次女のことがなければ、一昔前の典型的な保守的な家

族の構成ですよ。」

「母は、学校卒業後働いていないかもしれないですよ。年齢的に考えるとそうですよね。」

「母は、ちょっとこのぐらいで、次の自分の生き方を考える時期に入ったのかな。まだ、もう一回仕事しなおせる年齢やし。」

女性の人生全体からみてみるとそういうこともありそうです。

「ずっとこの暮らし方をしてきたのかな？」

家族の居住形態の変遷についてですね。

T. 「はい、次のグループにファシリテーター交代しましょうか。姉の話があまり出てないね」と、みんなの方を振り返ります。

「ぼっーとしてるのかなあ」と言っていました。

「心配かけづらい立場ではあるよな」

妹はあんな状態ですし、長女という責任感もあって…というところですね。

「姉妹で三歳違いは受験の時期が同じになりますよね。その時期に、妹に親はかかりきりやったのではないかなあ。上の子はほったらかしみたいに。」

たしかに三歳違いというのは、家族にとってリスクがありますよね。受験の時期はダブルで家族に緊張感を高めますね。ここでしばらく沈黙。

T. 「司会の方、ファシリテートしないと。」

あわてて、ファシリテーターのHさんはいいました。

「19歳っていうたら、親から離れたら、これから関心が家から離れていく時期ではないか。姉は合コンなんかに行ってるそう。」

親の視点から、「子どもが親離れして、母は寂しいだろうな」という意見が出ました。そこから、

「お姉さんは母を気遣っているかもしれない」という声も。

「姉妹の関係とか、母子の仲良さは、どうなのかな。あと、家族に男が一人でお父さんは、しんどいかなと。女性陣が仲良いか良くないかで、かなり変わるのではないかな」

関係性の話、ここまであまり出ていなかったですね。

「16歳って難しい時期やん。お姉ちゃんは19歳で安定してるけど。姉とは対等にはなれないし、その辺はどうですか？」

それを受けて

「そんなに仲良くないのかな。」

「母が姉妹のどっちと、くっ付いているかによって、変わってくるかなと。上とべったりなら、下の子は自由に外に出て行っているのではないかな。」

母と姉、母と妹の関係性ですよ。

「個人的な意見としては、41歳と19歳の世代間境界がないとかいう可能性もあるんじゃないかと。よく言う『友達親子』みたいなやつ。皆さんの中では考えられないですか？」

いまの時代の家族のひとつですよ。

Hさんは、しばらく間を置いて「その友達親子の続きなんですけど、芸能人でいうと山口智子世代というか。友達親子のハシリではないかなと。」

芸能人での例え、そして山口智子という絶妙なチョイス、わかりやすいです。これは私(千葉)の世代だからかもしれません。

「主婦はパートではないのですよね…、やっぱりそこがなんか…」とことばが少し途切れしました。

「専業主婦も珍しいとは思わない。結構いるよ。どう？」

「いやいや、勉強になります。」と引き下がりました。

「母が働いていないのは何でやろう？母は時間あるよね。どこに住んでいるのかにもよるかな。田舎とか、新興住宅地とか。」

これ、ホント地域によりますよね。

T. 「お父さんの話、していないね。あとカップルの関係も。世代間境界やサブシステムのことも。一人ひとりについての資質はどうかとか。家族にとってどういう時期なのか。例えば、お母さんは更年期障害とか、お父さんなら思い切った転職をしたがる人もある時期だとか。」

この人達にどんなことがありそうか。では、ファシリテーター交代。」

「父、公務員ですよ。母が働いていないのは、転勤があるとか交代勤務があるとか…かな」

「結構いい公務員ではないかなと。」

「地方公務員？」

「いや国家のほう？」

「それ、ちょっと悪い公務員？」(笑い)

「キャリア系とか。お父さんの性格とか人となりからいくと、キャリアに加えて、警察、教職、裁判所関係があるかな。」

「他に何かありますか。」

「お父さんの家族の中での立ち位置は、どうやろうと考え

ると、お父さんへの反発とか娘たちからありそう。」
思春期の娘。父への嫌悪。洗濯物は別。よくききます。
「そもそも、19歳16歳の娘は、父と会話とかするのかな。」

「しなさそうですね。」

「娘たちの父親へのイメージは、頼りない、煙たいとかではないかな。あと、そもそも父と母はどこで出会ったのだろうか。職場恋愛？」

T. :「母親が大卒でそれだったら、職場研修が済んだくらいで、すぐ妊娠、退職とかになるよね。雇った側にしたら、割りあわへんな。」

「見合いとかは、どうですか？」

T. 「少ないやろ。」

「最近ですよね」、「オリンピックより後」、「結婚した時期は、バブルの時やし、遊びすぎなぐらいちゃうか…」と出会いの話が続きました。

「結構いい公務員だとしたら、忙しい時期、働き盛りですよね。家にはいなくて、家族の中で孤立しがちな頃ですよね」

「父は子どものことを、母から報告を受けている感じがする？」

「母は外では働かず、父は一杯一杯。上世代に頼っている面はないのかな。」

上世代(祖父母との関わり)の話が続きます。

「介護はまだ、考えなくていい時期やろうし。」

「この家族に外から何かを与える人がいるのではないやろか」

「あと短大は意外と学費高いよ。四大より高いところもあるし」

「専門学校も学費が高いよね」

家計の話も出ました。

「なんか、母にエネルギーを感じないなあ。何でやろう。ジェノグラムにパワー感じない。」

これははっきりしない直感かもしれませんが、これまで出たこの家族の想像のトータルの印象がそう感じさせたのでしよう。

T. 「はい、ここまでにしましよう。非常に面白かったです。」

私の知っている家族と言うか、そんなに詳しくは知らないんですけど。これは早樫さんがよく使うやり方でして、新聞報道などで皆さんも知っている家族です。さて、誰でも

しょう？」

しばらくして手がぱらぱらあがり、誰かがわかったのをみて、言いました。

「そう、K市警察官の家族内殺人事件の家族。こうしてみても、あの年齢の専門学校の選択がわからないよね。父に女性関係があって、その悩みを母が次女に話して、次女が寝ている父を斧で殺したということらしいのだけれどね。父もずっと家にいる主婦にうんざりしている雰囲気があるわけです。」

ここにもいると思うけど、自分のパートナーに限って浮気(婚外恋愛)は絶対にないなんていうのは、大間違いです。かなりの確率で男女共にありますからね。

妻はその悩みを次女に言います。カップルの問題を娘に打ち明けています。これは親子間の世代間境界破りです。

こういう問題の対応の原則は、とにかくまずは線引きする事だと思います。夫婦間に酷い話があったとしても、それは子どもに話すことではない。

どうしても誰か味方してくれる人に言いたいなら、大めになるでしょうが、実家の母親にでも言いに行きなさい！という話です。

そうしたら実家の母は、「実はあなたのお父さんも若い頃…」なんて、びっくりの話をしてくれることがあるかもしれない。

無論それとて、内外の境界破りなのですが、母が娘に訴えてしまうよりはずっとましです。

ここでは加害者16歳、加害者の母、加害者の姉が残ることになりました。今後の家族は大変でしょう。

こんな結末を迎えるくらいなら、離婚したほうがずっと簡単。夫婦は契約関係なんだから、他人になれます。親子の多くは契約ではなく、DNA繋がり。そこが決定的に違います。

だから親子間には世代間境界が引かれているべきという考え方をします。この家族はそこに大きな問題が起きてしまいました。その典型的戒め、教訓の引き出せるケースかなと思って、ここで取り上げました。

16歳のその子には、いろんな思いがあると思います。父とぶつかっていたかもしれません。あと、警察官は男っばい、マッチョ、体育会系の仕事だよね。

それに、さっきも出ていたけど、この配偶者に力が足り

ないのは、ジェノグラムからだけでも臭っているよね。
妹は美術系の専門学校らしいです。

追記 ここでは新聞のニュースから、分かる範囲の情報を材料に、家族の構造を念頭に考えてみました。

実際のこの事件について、正確なことが論じられているわけではありませんし、そんなことが目的でもありません。

後期オリエンテーション

先ほども話したように後期は、各回毎に担当を決めて、それぞれ自分がやってみたい中味をリクエストして取り組むこととなります。ケースカンファレンスでもいいですし、前期に面接した家族にもう一度会ってみたいというのなら、呼んでくれた人に連絡とってもらって、来てもらい、「その後、いかがですか？」というのでもいいです。

自分の家族について考えてみたいというので、それを事例検討に出した人もあります。自分の家族だと開示しておこなってもいいですし、伏せて行うこともできます。

他には、実際に仕事で面接をしていて、そのビデオがあって、それ観ながらのケースカンファレンスでもいいです。何でも構いません。情報は少なくともそれにあわせてやりますし、無論情報が潤沢にあるのは、それでかまいません。では、休み時間に担当順を決めておいてください。」ここで、休憩です。

休憩

後半が始まります。

T. 「次回から、前半にはディスカッション素材としてこのテキスト(平木典子・中釜洋子著「家族の心理」サイエンス社 刊)を使います。それぞれが読んできて、関心の向いたことを自由に話し合います。

次週は第1章、第2章をやりたいと思います。読んでおいてください。

この訓練で今まで、テキストを読んでくる課題を実施したことはありません。今年は私一人で担当することになるので、ちょっと工夫してみました。読んで貰うと、興味深い気づきや発見はあるものです。

では次は、この家族を考えてみましょう。」
パワーポイントで以下を示しました。

父	42歳
母	39歳
長男	16歳 高2
次男	14歳 中3
三男	11歳 小5
父方祖母	

T. 「この家族にある大きな出来事が起きます。父親の失業に伴う経済問題です。そんな時、皆さんならどうしますか?」、とケースの父に年齢が近いであろう、Dさんにききました。

「家族みんなに話すかな。」

「嫁には言う。」

「子どもには言えないな・・・」

T. 「どっちがいいですか、女の人達どうです。これは流儀の問題ですけどね」

と、ここから始まって、しばらく、先ず誰に伝えるかあれこれ意見が出ました。

T. この夫は失業したことを、おばあさん(自分の母)だけに打ち明けました。すると、「そんなことは嫁さんには言うな!」とって30万円、用立ててくれました。

妻にいろいろ言われるのも鬱陶しい。とりあえず今は貰っておいて・・・と思った夫はそれを妻に給料だとして手渡しました。

一度そんなことをしてしまうと、事実を打ち明けるのは、更にハードルが高くなります。結局それから1年数ヶ月、ずっと彼は自分の母親のから生活費をもらい続け、妻には給料を装って渡すことになりました。

そんなある時、祖母が銀行から現金を引き出し忘れたことがありました。毎月お金を渡している側からすれば、週末だったので、ついうっかりした程度のことでした。

しかし、給料日に理由なく支給されなくなる会社などありません。妻にどう説明したらいいものか、父親は焦りました。そして、こんな状況のままでは三人の子ども達の将来に自分は責任が持てないと思ったそうです。

父親は誰にも話せないと勝手に思い詰め、一家心中を考え、まず子ども達を殺しました。父親の中では一年以上悩み続けたにもかかわらず、打開策の見あたらなかった問題でした。

しかし、妻は聞いたこともない話でした。祖母にとっても、いずれ一人息子のものになる財産の少しずつの先

渡しでした。このように大人の受け止めは、三者三様でした。そして心中事件によくあるように、大人が生き残りました。

どのようなことであれ、起こった事態を引き受ける覚悟で向き合ったら、たいいていのことは引き受けられるものです。「私には考えられないことだ！」等と言っていたことも、人は平気で受け止めます。事実を共有できていたら、メンバーは知恵も手も出せます。

しかしこの家族には、秘密の取引がありました。『失業』は所帯にとって重大事です。本来、その事実は先ず誰に伝えられていなくてはならないかです。それが妻であるのは自明のことです。原則として上世代との間に、世代間境界を明確にしておくという課題もあります。そこが崩されたこのケース場合、父親の身に起きた失職、無収入問題より、そのために打った手(問題解決法)が問題になりました。

様々な問題が誰の身の上にも起きています。人は対策としていろんな事をしますが、時々、「それは間違いでしょう！」ということをしてしまう事があります。誰も正解を知っているわけではないからこそ、手順づくりの適切さが重要になります。

問題が問題なのではなく、問題解決が問題なのだという言葉を思い出すのはこんな時です。

こんな事件があると、起きてしまった後で、いろいろ言う人もいますが、あまり意味はありません。

皆さんがこんな家族のことを考えなければならなくなったとき、「おかしいな？」とか「危ない話やな！」と未来の危険について予知的に働くセンサーを、備えておくことは大切です。家族を守るには、そういうことが大事になってきます。

起きてしまったことに同情的で、もっぱら心情を受け止めようというスタイルの人からは冷たいと言われるかもしれませんが、こうした見方が出来るようになっておくといいです。

父と祖母で秘密を抱えてしまうと、妻との間は疎遠になるのが当たり前のことです。問題なのは、問題解決として、ちゃんとやるべきことをやっているかどうかです。

何かがあったところで問題を完全に抑止することはできません。けれども、考えている人には、そこから、整理してできることがあります。

子ども達は亡くなってしまい、祖母と母が生きています。父親は刑務所です。子ども達は気の毒としか言いようがありません。

「まさか、こんな事になるなんて・・・」

このつぶやきは、そうなのですが、でも、それを未然に防ぐために出来ることがあると申し上げておきたいと思います。

家族には、「他の人には絶対言えないと思ったことこそ、私には言いなさい！」という関係をつくっておくことが大事です。思いやりから秘密にしてしまう関係ではなく、信じて打ち明けられる夫婦、親子関係にしておくことが大事です。

そういう意味でも、世間の一般的なわきまえとは異なる、自他、内外の境界感覚は大切です。

ここの訓練の寄って立つ考え方は、S.ミニューチンが「家族と家族療法」で述べていることです。そこに書かれている家族の構造的理解がベースになっています。

もっとも私は、それを忠実に学ぶようなタイプではないので、そこからの体験的暴走もあるかも知れません。日本人バージョンというか、関西人バージョンです。

おしまいに家族療法関連の世界のことに少し触れておきます。といっても、技法や理論的関心は薄いので、渦中に居続けて見えた、私の目に映った、日本の家族療法三十年の印象になります。

日本社会にはっきり見える形で「家族療法」が登場したのは80年代。それまでも統合失調症の精神科医療の中に「家族で」という取り組みはあったようですが、それほど力を持っていたとは思いません。もっとも、これは今も続いていることかも知れません。「家族療法」といっても、通じる所も、実践者も限定的です。

私の前に「家族療法」が登場してきた頃には、精神科医療分野に限られてはいなくて、いろいろな問題症状の家族が対象であるように見えました。

「家族が変化すると、患者も変化する」、などという家族療法の話の初めて聞いた時には驚きました。

それまで私はというか、世の中全体が、言うならば個人療法視線でした。そこでは、母子面接をすることもありましたが、たいいてい本人(子ども)の足引っ張っている親といった感じで、困った両親が多いと思っていました。

一般システム論をベースの家族システム論は、従来型の因果論的、原因究明型の問題解決法ではありません。家族のどこか一部が変化すれば、家族全体も必ず影響を受けるものだということでした。

こういう考え方ができるようになると、何が悪いか、誰が問題かを追求するのではない問題解決が摸索できるようになるのに驚きました。

その後、ちょっとだけ家族療法はブームになりました。しかし、印象的だったビデオやマジックミラーの使用、バックスタッフシステム等は、どこでも出来る事ではないということで、フェードアウトしてゆきました。

実際、設備やスペース、人的なコストを考えると、このまま実現できる場は非常に限定された方法でした。

私が実践していた場所は、児童相談所でしたから部屋や設備は公共物として用意されています。そしてスタッフも公務員として、賃金が確保された状況でした。だから比較的長く実施可能だった側面は否定できません。

しかし考え方は、それまで私たちの持っていた基本枠組みとは異なっていました。病巣を取り除いて治すという発想ではない、問題解決。ざっと言うなら、これが私にとってのシステム論でした。

よくなったら、それでいい。どこかが変われば、他も変わる。ここが変わるべきだ！ではなく、どこが変わっても良い。

先に述べた警察官一家も、両親・夫婦で、浮気問題を話せていたら、結果は違っていたと思います。

「過ちを改め、生活を正すのは浮気している方でしょう。私は何も悪いことはしていないのに・・・」、なんて、かたくなにならずに、落としどころを当事者で探る手はあるのです。

でも人はなかなか曲げないところがあります。ありえないとわかっている、非のある相手を責めて、猛省を促します。

「そんなことは起きないのは分かっているでしょう、いったいどうしたいの？」と言いたくなるような状態です。

「相手に後悔させ土下座させて、その時に、離婚だっ！と言ってやる！」なんて言うんですね。

膠着状況を作り出し、身動きできない状態を作っておいて、グズグズやるのが習慣の人が少なくありません。

変化はいろんな要因で起きる可能性を常に秘めています。愛人に若い彼氏ができたりしたら、夫は帰ってくる

ことになって、夫婦の関係は変わっていったりしますね。

どこで変化が起こっても構わないし、正しく変わらねばならないなんていうのも、大して根拠のない信念です。物事はドンドン悪化することだってある。とにかく、無変化状態を変える、これを「変化の処方」と考えます。

前向きに考えるとしても、その時、変わりやすいところが、変わる方が楽です。変化はその人でなくてもかまいません。夫婦仲が悪いといっている、加齢と共に、老後のこと考えて、一人になるよりまだからというので治まるとかね。変わらないものはないということを知っている、家族についての考え方です。

以上、後期初回はニュース事例を二つ使って進めました。ではまた次回。

2013.5.25 追記

この事件の話を後日話題にした場での記憶にこんな事がある。

ある女性のカウンセラーが、父親殺しの事件を指して「これは確実に父親の性的虐待が絡んでいる」と言った。私はそんなことを考えたことがなかった。

そう言われてあらためて、家族に起こった出来事と、その原因と言われているものとのバランスを考えた。世の中には、「そんなことぐらいで・・・」と言いたくなる事件がたくさんある。その一方で、そんなことが起きるのは、よくよくの事だという考え方もある。

果たして何があったのか、それを確定するのが目的ではない。事実として家族にはこんな事が起きるのだと記憶しておくこと。その背景にどんな想像を巡らせるかを言語化する習慣を持つておくことは、今後のケース処遇に役に立つに違いない。

